

(19) 日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2001-162849

(P2001-162849A)

(43) 公開日 平成13年6月19日 (2001.6.19)

(51) Int.Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	テフロン <sup>®</sup> (参考)
B 4 1 J	2/345	B 4 1 J 3/20	1 1 3 A 2 C 0 6 5
			1 1 3 B
			1 1 3 K

審査請求 未請求 請求項の数 2 O L (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願平11-347434

(22) 出願日 平成11年12月7日 (1999.12.7)

(71) 出願人 000002325

セイコーインスツルメンツ株式会社  
千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地

(72) 発明者 東海林 法宜

千葉県千葉市美浜区中瀬1丁目8番地 セイコーインスツルメンツ株式会社内

(74) 代理人 100096286

弁理士 林 敬之助

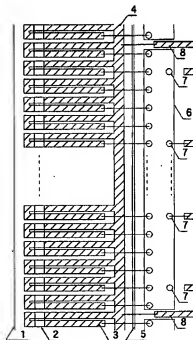
Fターム (参考) 2C06 KA06 KA14 KB14 KK15

## (54) 発明の名称 サーマルヘッド

## (57) 【要約】

【課題】 電極の抵抗分による濃度斑が発生しないサーマルヘッドを提供する。

【解決手段】 リード電極と発熱体のうちの少なくとも一方の抵抗値を、共通電極配線の外部接続端子に近いところ程大きな値になるように変化させるとともに、ドライバICの複数のグラウンド接続端子のうち、前記共通電極配線の外部接続端子に近いところに対応する部分の接続を行なわないことによって、発熱体での発熱量を均一にし、印字時の濃度斑をなくすようにした。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 複数の発熱体と各発熱体に通電駆動するドライバICと、これらを接続する個別リード電極と、各発熱体に共通に接続する共通電極配線と、該共通電極配線に電源からの電圧を供給するために設けられた電圧供給端子から成るサーマルヘッドにおいて、発熱体の抵抗値又は個別リード電極の抵抗値の少なくとも一方を、該共通電極配線と接続する該電圧供給端子に近いところ程大きな値になるように変化させることを特徴とするサーマルヘッド。

【請求項2】 前記ドライバICの複数のグランド接続端子のうち、前記共通電極配線と接続する電圧供給端子に近いところに対応する1または2以上の端子と接続を行わないことを特徴とする請求項1のサーマルヘッド。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、例えばファクシミリやプリンタなど印字装置で使用するサーマルヘッドに関する。

## 【0002】

【従来の技術】 サーマルヘッドの回路は、発熱体抵抗とそれを個別にオン・オフ制御するドライバICとによって構成されており、これら複数の発熱体抵抗とドライバICとは個別リード電極で接続され、さらに各発熱体には、共通電極配線が接続される。なお、実際には各発熱体の個別リード電極および共通電極配線には抵抗分があり、同様にドライバIC内部に配線されているグランド電極配線にも抵抗分がある。

【0003】 サーマルヘッドは、電圧供給端子から共通電極配線に電源からの電圧を供給し、ドライバICを選択的に駆動してオンにすると、発熱体が選択的に駆動されて発熱することになる。このように発熱体を選択的に発熱させて、この熱によりインクリボンを用紙に転写させるか、或いは感熱用紙を直接発色させて印字を行なう。

【0004】 印字濃度は発熱体の温度によって変るため、濃度斑をなくすためには、各発熱体の温度が均一になるように制御されなければならない。そのため発熱体と個別リード電極は、その抵抗値ができるだけ均一になるように作られており、また、共通電極配線の抵抗はできる限り小さくなるように設計され、ドライバICのグランド電極は、外部接続端子をできるだけ多く配るようになっている。

## 【0005】

【発明が解決しようとする課題】 ところで、サーマルヘッドの最近の傾向としては、小型化および低価格化に拍車がかかり、非常にサイズが小さくなってきている。従って、共通電極配線の領域が広くとれず、結果としてかなり大きな配線抵抗分が存在してしまう。そのため、こ

の部分での電圧降下が起こり、結果として濃度斑が発生する。これを防ぐ方法としては、共通電極配線部分に厚膜導体等を敷設することにより、配線抵抗を下げることで行われるが、コスト上昇の原因となる。また、サーマルヘッドは近年携帯機器にも搭載され、電池でも駆動されるようになっている。このようなサーマルヘッドは、低い電圧で駆動されるため、十分な電力を得るために発熱抵抗が小さくしなければならず、即述した電極の抵抗分による濃度斑が発生しやすくなる。本発明は、このような点を鑑み考案されたものであり、複雑な構成や構造をとることなく、濃度斑のないサーマルヘッドを提供することを目的とする。

## 【0006】

【課題を解決するための手段】 上述の問題点を解決するため、本発明においては、個別リード電極と発熱体のうちの少なくとも一方の抵抗値を、共通電極配線の電圧供給端子に近いところ程大きな値になるように変化させるとともに、ドライバICの複数のグランド接続端子のうち、前記共通電極配線と接続する電圧供給端子に近いところに対応する部分の接続を行わないことによって、発熱体での発熱量を均一にし、印字時の濃度斑をなくすようにした。

## 【0007】

【発明の実施の形態】 以下、本発明の実施の形態について詳述する。図1は、本発明のサーマルヘッドの平面図である。図1に示すように、サーマルヘッドは、発熱体2や個別リード電極3および共通電極配線4の層が形成されたヘッドチップと、接続基板5を有する。ヘッドチップは、セラミック基板1上に、各種層が形成されて構成される。まず、セラミック基板1上には、断熱層の機能を有するガラス系材質からなるグレース層が形成されている。グレース層の上には、その長手方向に亘って所定間隔で連続的に発熱体2が形成されている。また、各発熱体2の図中左右両側の端部に接続するようには、アルミニウムなどの金属からなる個別リード電極3または共通電極配線4が形成されている。さらに、発熱体2の上部には、保護膜が形成される。

【0008】 このようなサーマルヘッドにおける各発熱体2と個別リード電極3または共通電極配線4との接続構造は、2種類に分類される。一方は、セラミック基板の各発熱体が配列される端部側に共通電極配線を有する共通電極タイプである。このタイプでは、各印字ドットに対応する各発熱体からの個別リード電極はセラミック基板の他端部まで延びており、また、共通電極の両端部からの引き出し配線もセラミック基板の他端部まで延設されている。他方は、いわゆる、Uターン電極タイプである。すなわち、各印字ドットに対応する一対の2つの発熱体を有し、これら発熱体の一端部同士がU字状の配線と接続されると共に、一方の発熱体がセラミック基板の端部まで延びる個別リード電極に接続され、且つ他方

の発熱体がセラミック基板の端部に設けられた共通電極配線に接続されている。そして、何れの場合も、共通電極配線に電圧供給端子を介し接続し、各個別リード電極にICチップを介して選択的に電圧を印加する。

【0009】ここでは、Uターン電極タイプを例に説明する。各発熱体2は、図1に示すように一对の2つの発熱体からなり、各発熱体2のそれぞれの両端部には、アルミニウムの薄膜層等からなる電極が接続されている。ひとつの発熱体は個別リード電極3が右端部に接続されている。また、もうひとつの発熱体は右端部が共通電極配線4に接続され、セラミック基板1の発熱体2とは反対側の端部に設けられた電圧供給端子に接続されている。さらに、一对の発熱体2のそれぞれの左端部は、電極によりU字状の配線で連結されている。

【0010】一方、配線基板5はガラスエポキシなどの回路基板であり、この基板上に、ドライバIC6とグラウンド接続端子7と電圧供給端子8が設けられている。ドライバIC6は、上述した各発熱体2を選択的に発熱させるための駆動信号を出力するドライバであり、駆動できる発熱体の数による所定の物理ブロック毎に設けられている。ドライバIC6には、個別リード電極3と接続する部分やグラウンド接続端子7と、実際にはその他に制御信号供給の端子が存在する。また、電圧供給端子8は、発熱体2に電圧を印加するためのものである。これらドライバIC6のそれぞれの端子は、上述した個別リード電極3やグラウンド接続端子7とそれぞれボンディングワイヤにより接続される。また、共通電極配線4は、ドライバIC6を介さず直接電圧供給端子8に接続される。なお、ドライバIC6及びボンディングワイヤは、封止樹脂によりモールドされる。

【0011】上述のような構成であると、ドライバが同時にオンされた場合、共通電極配線4に流れる電流が大になり、この部分の抵抗による電圧降下が大きくなる。このとき共通電極配線4と電圧供給端子8の接続部分から遠いところほど電圧降下が大きくなり、結果として電力ロスとなり、発熱体2での消費電力の差が生じることになり、濃度差が発生する。図2に、6.4の発熱体を駆動できるドライバIC6における、1物理ブロックの中の電力ロスの差を示す。

【0012】発熱体2の抵抗値と個別リード電極3の抵抗値が全く均一であるにもかかわらず、両端に比べて中央の電力ロスが大きいのは、共通電極配線4の電圧降下によるものであるが、ドライバIC6の内部で配線されているグラウンド電極配線の電圧降下による分も加算されている。これを改善するために、本発明では、共通電極配線4と電圧供給端子8の接続部分から遠いところほど、発熱体2の抵抗値又は個別リード電極3の抵抗値の少なくとも一方の抵抗値を小さくし、逆に近いところでは大きくなるように変化させた。変化させる量は、計算で正確に求めることが望ましいが、必ずしも計算上

全く均一である必要はなく、相対的に発熱体の消費電力のばらつきが改善されれば実用上は問題ない。

【0013】ところで、発熱体2の抵抗値又は個別リード電極3の抵抗値を変化させる場合、発熱体2の形状を変えるか、個別リード電極3の長さまたは幅を変化させる必要があるが、発熱体2の抵抗値が小さくなるほど、変化量を多くしなければならぬ。このとき変化量が非常に大きい場合には、実質的に変化させることが困難な場合がある。そこで、本発明では、加えてドライバIC6の複数のグラウンド接続端子7のうち、前記共通電極配線4の電圧供給端子8に近いところに対応する部分の接続を行なわないようにした。図1のように、ドライバIC6のグラウンド接続端子7は、ドライバIC6内での電圧降下が発生しないように、複数の接続端子があり、それは数が多いことが望ましく、しかも全て外部接続端子と接続するのが普通である。しかし、本発明においては、前述のように、加えて共通電極配線4の電圧供給端子8に近いところに対応する部分の接続を行なわないようにする操作を行い、実質的に共通電極配線4の電圧供給端子8に近いところの抵抗が大きくなるようにして、各発熱体の発熱量が均一になるようにした。

【0014】図3に、発熱体2の抵抗が100Ωの場合で、ドライバIC6ことの1物理ブロックあたりが6.4ドットで、グラウンド接続端子7を8個有するドライバIC6の場合の、この操作によって電力ロスを改善した例を示す。まず本例では、個別リード電極3の抵抗値を、共通電極配線4の電圧供給端子8に近いところ程大きな値になるように変化させている。さらに、8本存在するグラウンド接続端子7をすべて接続したときと、両端2本を接続せず、内側6本のみ接続したものを比較して示してある。8本全て接続した場合の物理ブロック内の最大値と最小値の差は約5.1%存在するが、両端2本を接続しない場合は、最大値と最小値の差は約3.4%に改善する。

【0015】図3の例では、発熱体2の抵抗値又は個別リード電極3の抵抗値を変化させるにあたっては、単純に共通電極配線4の電圧供給端子8に近いところ程大きな値になるように変化させているが、電力ロスの大きいところはさらに抵抗値を小さくし、電力ロスの小さいところはさらに抵抗値を大きくすれば、改善効果が増大することは言うまでもない。

【0016】上述した実施形態では、いわゆるUターン電極タイプの接続について述べたが、各発熱体が配列される端部側に共通電極配線を有するタイプの接続にも応用できる。すなわち、発熱体側に設けられた共通電極配線の外部端子への接続を共通電極配線の両端部以外にも複数設けることにより、本発明が適用できる。

【0017】

【発明の効果】以上述べたように、本発明によれば、複数の発熱体が同時に駆動されたときに共通電極配線の電

圧供給端子の近傍と、そこから離れた箇所における発熱体の発熱差をなくすることができるので、印字をした時の温度斑をなくすることができる。特に、サーマルヘッドで、例えば画像を出力するような、発熱体抵抗を多数同時にオンした場合や、電池駆動する携帯機器で使用される発熱体の抵抗値が小さいものに対しても、温度斑のない印字品質の良好なものを提供することができる。しかも、共通電極配線の接続本数を減らすことは、工数の減少にも貢献する。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明によるサーマルヘッドの平面図である。

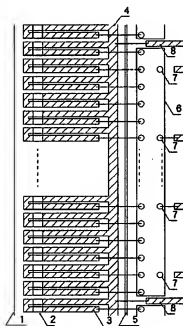
【図2】従来のサーマルヘッドの電力ロスの例である。

【図3】本発明によるサーマルヘッドの電力ロスの改善例である。

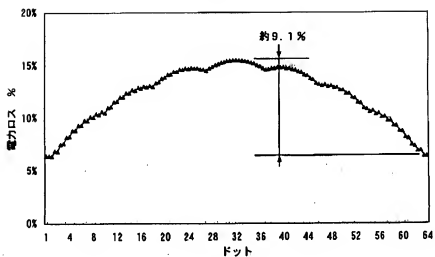
【符号の説明】

- |   |          |
|---|----------|
| 1 | セラミック基板  |
| 2 | 発熱体      |
| 3 | 個別リード電極  |
| 4 | 共通電極配線   |
| 5 | 配線基板     |
| 6 | ドライバIC   |
| 7 | グランド接続端子 |
| 8 | 電圧供給端子   |

【図1】



【図2】



【図3】

